

第8回

オペラの祭典Ⅳ イタリアオペラの巨匠「ヴェルディ」の世界 **曲目解説とオペラ「椿姫」のあらすじ**

第1部『ヴェルディ名曲アラカルト』曲目解説

曲 名	解 説
①「ナブッコ」より 「天国の門は開かれた」	ヴェルディ3作目のオペラで、このオペラの大成功によってヴェルディは一躍有名になった。物語は、旧約聖書の「バビロン捕囚」を題材としている。舞台は紀元前のエルサレムとバビロニア。バビロニア王のナブッコは自らを「神」と称したために神の怒りに触れて狂乱し、奴隷腹の娘アビガイッレに王座を奪われてしまう。アビガイッレは、ナブッコと正妻との娘であるフェネーナに復讐するため、彼女の処刑を命じる。このアリアは、広場でフェネーナとヘブライ人たちの処刑が行われようとする場面でフェネーナによって歌われる。
②歌曲集「6つのロマンツァ」より 「エリーザよ、疲れた詩人は死にゆく」	1838年に出版された初の歌曲集の中の1曲。ヴェルディ初期の作品で、死を前に恋人に別れを告げる詩人の想いが美しいメロディーに載って歌われる。詩はトンマーゾ・ビアンキ。
③「ファルスタッフ」より 「夏のそよ風にのって」	ヴェルディの最後のオペラにして喜劇。ファルスタッフは底をついたお金を工面するために二人の人妻を口説こうと同じ文章のラブレターを送る。その失礼な態度に女性たちはファルスタッフへの復讐計画を立てる。ウィンザー公園にあるハーンの櫨の木。月明かりの真夜中にナンネッタは妖精の女王に変装し、ファルスタッフを懲らしめようとする場面で歌われる。
④「海賊」より 「あの人はまだ帰ってこない」	ヴェルディ初期のオペラ。エーゲ海の古い塔の中のメドーラの部屋。海賊の首領コルラードの恋人メドーラがハープを弾きながら、「あの人はまだ帰ってこない、私の頭から暗い考えを～」とい

	つも留守を守る寂しさを歌う。
⑤「オテロ」より 「アヴェ・マリア」	シェイクスピアの悲劇を原作として作曲されたヴェルディの傑作。舞台は15世紀末、キプロス島の海辺にある砦。ヴェネツィア共和国の將軍でムーア人のオテロの妻デスデーモナは、オテロに恨みのあるイアーゴの策略でオテロから不義の疑いをかけられ、夫の怒りの理由が分からず憔悴して、マリア像の前で祈りを捧げる。
⑥「イル・トロヴァトーレ」より 「炎は燃えて」	イタリアオペラの最高作とも言われる。舞台は15世紀、スペインのアルゴン地方。アズチーナの母（ジプシーの老婆）は、この地方の貴族であるルーナ伯爵の弟が赤ん坊の頃、呪いをかけたと言いがかりをつけられ、生きたまま火炙りの刑に処せられた。このアリアはアズチーナがその時の光景を息子マンリーコ（実はアズチーナが復讐のために誘拐して自分の息子として育てたルーナ伯爵の弟）に語る場面で歌われる。
⑦「運命の力」より 「神よ平和を与えたまえ」	ヴェルディ中期の傑作オペラ。舞台は18世紀のスペイン セヴィリア。訳あって男装し、岩山の洞窟で修行僧として神に許しを請いながら過ごすレオノーラ。かつて駆け落ちの途中ではぐれてしまった恋人アルヴァーロを思いながら、自らの運命を嘆いて歌う。
⑧「リゴレット」より 四重唱「美しい愛らしい娘よ」	「運命の力」と並んでヴェルディ中期の傑作オペラの一つ。マッダレーナを口説くマントヴァ公爵、巧みにあしらうマッダレーナ、公爵の不実な姿にショックを受けるジルダ、娘を慰めながら復讐の思いを強めるリゴレット。4人が同時にそれぞれの心情を歌い合う。男女2組に分かれながら四声が立体的に絡み合う見事な四重唱であり、オペラ史上最高傑作の四重唱として知られている。
⑨「ナブッコ」より 合唱「行け、わが想いよ、黄金の翼に乗って」	第3幕で、囚われの身となっているヘブライ人たちが故郷を想い歌う。このオペラでは殊に有名な合唱。また、この歌は当時オーストリアに支配されていたイタリアの人たちを大いに鼓舞し、第二の国歌と言われている。

第2部 オペラ『椿姫』ハイライト 解説とあらすじ

イタリアオペラの代名詞とも言われるヴェルディの『椿姫』は、ヴェネツィアの「フェニーチェ劇場」からの依頼で、1853年に作曲初演された。しかし、娼婦をオペラの主人公にすることは当時では常識外れであり、しかも同時代の物語であったため受け入れられず、題名を「ラ・トラヴィアータ（道を踏み外した女）」とし、時代設定を150年前のルイ15世時代にして初演された。短い練習期間や歌手の問題もあり、初演は成功とは言えなかったが、徐々に評価は高まり、1年後の他劇場での再演では華々しい大成功を収めた。その後、『ラ・トラヴィアータ』の名声は世界中に広まり、今日に至っている。

あらすじ

【第1幕】 1850年頃のパリ ヴィオレッタ家の客間

パーティーに招かれたヴィオレッタ（高級娼婦）の友人達はダンスをしに別室に去るが、気分の悪くなったヴィオレッタはその場に留まる。アルフレードも残り、彼女への思いを告げる。自分のことは忘れてほしいと言いつつ心揺れるヴィオレッタ。一同が帰った後ひとり思い悩む。家の外でアルフレードが「愛はこの世のときめき」と歌うのを聞き、ますます苦しむヴィオレッタは、アリア「ああ、そはかの人か〜花から花へ〜」を歌う。



【第2幕第1場】 パリ近郊の田園の中の家

ヴィオレッタがパリの派手な生活を捨てて3か月、アルフレードは2人でひっそりと暮らす喜びを歌う。しかし、メイドのアンニーナからヴィオレッタが私財を売って生活費を工面していることを聞き、自分の不甲斐なさを恥じて飛び出して行く。現れたヴィオレッタのもとに、アルフレードの父ジェルモンが訪れ、妹娘の幸せな結婚のためにアルフレードと別れるよう迫る。強引なジェルモンの説得に、ついにヴィオレッタは自分が犠牲になることを承知する。戻ってきたアルフレードに愛を告げ、走り去るヴィオレッタ。彼のもとにすぐにヴィオレッタからの別れの手紙が届く。傷心のアルフレードのもとに父が現れ、アリア「プロヴァンスの海と陸」を歌って慰めるが、何も聞かず、彼女に復讐すると飛び出して行く。



【第2幕第2場】 フローラの家の客間

フローラ家のパーティーにひとり現れるアルフレード。間もなくヴィオレッタが男爵と共に現れる。男爵との賭に勝ったアルフレードに、立ち去るよう請うヴィオレッタ。逆上したアルフレードは、人々の前で借りを返すと言って彼女に金を投げつける。女性を侮辱したと人々に非難を浴びるアルフレードに真実を語れず苦しむヴィオレッタ。彼に決闘を申し込む男爵。その場は騒然となる。



【第3幕】 パリ ヴィオレッタの寝室

病の床に伏すヴィオレッタ。ジェルモンからの、息子と許しを請いに伺うという手紙を読む。ついにアルフレードがやって来て愛を確かめ合うが、喜びの中ヴィオレッタは命尽きる。



※写真は、栃木県総合文化センター開館20周年記念公演(2012.7.15)のもの

主 催 栃木県オペラ協会
指 揮 佐藤和男
管弦楽 栃木県交響楽団